

# 英語を専門としない大学生に対する英文法基礎的知識再構築の試み

—be 動詞理解と MAP Grammar の活用—

Practical Research to rebuild basic grammatical knowledge of English for non-English major students

—Understanding be-verb and utilizing MAP Grammar—

加藤 みゆき Miyuki Kato

(家政学部こどもの生活専攻)

## 抄 録

英語の基礎知識が欠如している大学生に、限られた時間内で最低限の基礎的文法知識を再度身に付けさせるために、優先的に必要と考えられる事項を実践授業で指導し結果を検証した。多くの学生に共通して be 動詞の誤用が見られることから、本研究の指導内容は、be 動詞の意味と日本語の「ウナギ文」の正しい理解にフォーカスした。さらに、文法知識がなくても英文を産出できる教育英文法「意味順」を使って英作文の指導をし、事前、事後に学生の理解度を検証、考察した。その結果、be 動詞のいくつかの意味の中で特に学生にとって理解が難しいものが判明した。これはリメディアル教育における優先すべき指導事項選定に資するものと思われる。「意味順」については、事前に語彙力を身に付けさせておかなければ効果的に使うことができないことが分かった。

## キーワード

リメディアル教育 remedial education    be 動詞 be-verb    ウナギ文 *unagi-bun*  
意味順 Order of Meanings    小学校英語教育 elementary school English education

## 目 次

- 1 序論
- 2 意味順英語学習法
- 3 be 動詞誤用の考察と原因
  - 3.1 日本人学習者に多い be 動詞の誤用
  - 3.2 be 動詞誤用の原因
  - 3.3 be 動詞の意味と使い方
- 4 調査と実践方法
  - 4.1 調査方法
  - 4.2 授業実践
  - 4.3 検証方法と結果
- 5 結果検証と考察
  - 5.1 正答率が高かった設問
  - 5.2 正答率が低かった設問
- 6 まとめ

## 1 序論

近年、大学生の基礎的な英語力向上を目的としたリメディアル教育が多くの大学で実施されている。執行・大島・船田・カレイラ(2019)は、リメディアル教育を必要とする大学は7割あり(文科省、2017)、それらの大学では中学校3年間で学ぶ語彙、文法を重点的に指導していると報告している。甲田(2011)は、リメディアル教育とは、「英語の基礎学力を欠いた学生に対する「補正・補習」教育を指すもの」とし、「基礎学力」とは「中学校、高等学校で当然習得しているはずの英語力もしくは、英語に関する基礎知識」と定義し、「極めて短時間に効率良く基本事項の確認・定着が行われなくてはならない」と指摘している。そして、指導内容の優先事項として、1.用語(基本的な文法用語の意味確認)2.スペリング、3. S+V+C、4. S+V+O、5. 時制、6. 前置詞句を挙げている。

筆者も英語を専門としない学生の指導において、やはり中学校英語程度の基礎知識を身に付けていない学生が多いことを実感し、リメディアルの必要性を感じているが、通常の英語の授業のなかで、中学、高校で学んだ語彙、文法事項すべてを指導することはできないのが現実である。しかし、多くの大学生は基礎知識が欠落しているにもかかわらず、英語を話せるようになりたい、英語を書けるようになりたいという願望は持っている。そのため、筆者は15回の講義という限られた時間のなかでも、英語を使っている、使えるようになったという実感を学生が味わうことができ、そのような達成感が、語彙表現や文法事項等の習得のための地道な学習に自ら取り組もうとする意欲につながるような授業を模索している。

本研究では、そのような授業を実現するために、意味順英語学習法(Tajino, 2018)を採用した。ただし、「意味順」を活用するためには、まず伝えたい日本語の意味を正しく捉えられることが必要である。しかし、多くの大学生は伝えたい日本語を英語にするために必要なステップである「日本語が伝えている意味を正しく捉えること」ができていない。そこで、今回特に多いbe動詞の誤用の原因と考えられる日本語の意味の捉え方について、間違いの傾向と原因を検証し、検証結果に基づいて必要な解説を行ったうえで、解説後に理解度と正しい英文を書くことができるかを検証した。

次の第2章では、意味順英語学習法について論じ、

第3章で日本人学習者によるbe動詞誤用の傾向と原因を考察、併せてbe動詞の本来の意味と使い方についても考察する。続く第4章では、大学生のbe動詞誤用の傾向と対策のために行った調査、実践授業の指導内容と事後の結果を論ずる。第5章では、第4章の結果検証と考察、第6章では実践結果に基づく効果的な指導法への示唆と今後の課題を論ずる。

## 2 意味順英語学習法

意味順英語学習法とはTajino(2018)が開発した英語初級者のための教育英文法で、WHO(だれ、なに)→DOES(IS)/ (する、です)→WHO(M)/WHAT/ HOW(だれ、なに、どのように)→WHERE(どこ)→WHEN(いつ)の意味順に、語句を当てはめて英文を作る学習法である。

英語は語順が意味を決定する固定語順言語で、これを間違えるとコミュニケーションに支障をきたす。Tajino(2018)は、このような重大な誤り(global error)は避けるべき誤りであり、初級者はまずこの意味順学習法を使って英文法の全体像を理解し、あとから細かい文法事項の学習を進めていくことを提案している。今回、意味順学習法を選択した理由は、従来の5文型をベースにする英文法は、それぞれの品詞の働きや関係性を知らないと使うことができないもので(Tajino, 2018)、大学生の文法知識の現状を考えると、これら5文型を使っての英作文は大変難しい。いっぽうで「意味順」は、「だれが/する(です)/だれ・なに/どこ/いつ/どのように(して)/なぜ」という意味順マッピングに、意味の順番に語句を当てはめていけば英文を作ることができるので、品詞等の文法用語をあまり知らない学習者でも効率よく英作文ができ、その効果が報告されている(Jojima, Oyabu, Jinnouchi, 2018)。

## 3 be動詞誤用の考察と原因

本章では、日本人学習者に多いbe動詞の誤用とその原因を考察する。

### 3.1 日本人学習者に多いbe動詞の誤用

授業の中で、「私は家政学部です」という日本語を英訳させると、実に多くの学生がI am home economics.と書く。仮にこの英文を日本語に置き換えると、やはり「私は家政学部です。」となることか

ら、学生はこの英文が間違っていることに気付かない。

永田、西手、乙武 (2018) は、この誤りを「be 動詞の過剰一般化」と呼び、日本人英語学習者に多い誤りと指摘している。

和泉、内元、井佐原 (2005) は、日本人英語学習者 1281 人の英語発話の書き起こしデータ The NICT JLE (Japanese Learner English) Corpus<sup>注1</sup> を分析し、助動詞のエラー216 件のうち、助動詞 be に関するエラーは 94 件(約 43%)、動詞の語彙 エラー858 件のうち、be 動詞に関するエラーが 170 件 (20%)を占めていると述べ、エラーの内容のほとんどが初歩的な脱落エラーであったと報告している。そして、このコーパスの分析結果では、日本人英語学習者にとって be 動詞の習得順序は早くはないと分析している。

これらのことから、be 動詞は日本人英語学習者である大学生にとって、習得が比較的困難な文法形態素のひとつであると考えられる。

### 3.2 be 動詞誤用の原因

田川 (2008) は、be 動詞の誤用の例として次の例文 ((1)a、b) で、その原因を説明している。尚、非文法的な文の先頭にはアスタリスクマーク「\*」が付けてある。

(1) a. カード遊びをしている幼児が「僕はカードを 4 枚持っている」という意味で発話

\*I'm four.

b. 「デンマークにはレゴランドがある」という意味の発話

\*Denmark is Legoland.

田川は、原因として「日本語に多い『主題中心文』をそのまま英語に転写した形を用いた結果の構文である」と推測し、be 動詞を日本語の助詞「は」にあたるものとして使用し、Topic phrase に相当するものを作ろうとしていると解釈することで、この誤用を説明できるとしている。

白畑・若林・村野井(2010)は、同誤用を「母語からの転移」として、第二言語学習者の習得言語とされる中間言語の特性のひとつである説明している。具体的には、日本語は「DP1 は DP2 (だ/です)」構造が頻繁に使用される主題優勢言語で、このような内容は英語の DP1 is DP2 の構造を利用して伝えることができるが ((2)a)、必ずしも日本語の「DP1

は DP2 (だ/です)」が全ての英語の「DP1 is DP2.」に直訳できるわけではない((2)b) ((2)c)ことから、日本人学習者がこのような誤りを犯しやすいと説明している。

(2) a. John is one of my classmates.

ジョンは私のクラスメートだ。

b. \*Today is my friend come from Kobe.

今日は私の友達が神戸からやってきます。

c. \*My work shop was not busy.

私の働いている店は忙しくなかった。

日本語の「DP1 は DP2 (だ/です)」の構造で、大学生が DP1 is DP2. を誤って当てはめてしまう日本語の文構造は、いわゆる日本語の「ウナギ文」とあると筆者は考える。「ウナギ文」とは、料理屋でウナギを注文する際の「ぼくはウナギを食べる。」という意味で、「ぼくはウナギだ」という発話である。「ウナギ文」は、多くの研究者によって語用論的分析がなされている日本語の大きな特徴のひとつである(高本、1995)。

以上のことから be 動詞誤用の原因は、be 動詞を日本語の助詞のように使用する、DP1 は DP2 (だ/です)」を全て DP1 is DP2. に当てはめてしまう、特に日本語に特徴的な「ウナギ文」をそのまま英語の文章構造に当てはめることが可能性として指摘できる。

### 3.3 be 動詞の意味と使い方

次に be 動詞について考察する。

『総合英語 One』(金谷、馬場、高山、2014)では、英語の A is B.には、次の2通りの意味があると述べている。(A、Bともに名詞の場合)

(3) a. A と B はイコールである。

Tokyo is the capital of Japan.

b. A は B のメンバーである」

A whale is a mammal.

一方で、日本語で「A は B です」と言えるのに、英語の A is B.で本来の意味を表せない例として次のような誤訳の例を挙げている。

c. \*I am spaghetti.

レストランでの注文時に交わされる会話「私はスパゲッティがいいです」という意味の「私はスパゲッティです」

d. \*I am the Shinkansen.

「私は新幹線で行きます。」という意味を表す  
「私は新幹線です。」

e. \*He is sickness.

A is B.の B が名詞ではなく形容詞でなければ  
いけない「彼は病気です」を間違って B の部  
分を名詞にしてしまう例

f. \*My father is a kitchen.

B を名詞ではなく前置詞を伴う場所を示す語  
句にしなればいけない「父はキッチンです」  
を、A is B.で置き換えた例

g. A=B.ではない例 (明日は英語のテストです。)

\*Tomorrow is an English test.

(資料1)

☆正しい英文の番号に○をつけてください。

1. 私は大学生です。  
I am a university student. ( )
2. 「先生はどこですか？」の質問に  
「彼は職員室です」  
He is a teachers' office. ( )
3. 父はアメリカ人です。  
My father is American. ( )
4. 私は18歳です。  
I am 18-years old. ( )
5. 私はバスケットボール部です。  
I am a basketball club. ( )
6. このハンバーガーは大きいです。  
This hamburger is big. ( )
7. 明日は英語のテストです。  
Tomorrow is an English test. ( )
8. レストランで「何にする？」の質問に  
「私はスパゲッティ」  
I am spaghetti. ( )
9. 「あなたはどうやって大阪に行きますか」  
の質問に「私は新幹線です。」  
I am the Shinkansen. ( )
10. 「どのアーティストが好きですか？」の質問  
に「私は嵐！」  
I am Arashi. ( )
11. 目標は保育士です。  
My goal is a nursery school teacher.  
( )

## 4 調査と実践方法

この章では、大学生の be 動詞の現状の理解度を  
知り、誤用の原因を探るために行った調査の方法と  
分析結果を報告する。

### 4.1 調査方法

調査対象者は、「英語Ⅱ」を受講している3年  
生2クラス(11人)と「英会話」クラス1年生2  
クラス(53人)、計64人の英語が専門ではない学生  
である。

手順は、be 動詞を使った例文を学生に提示し、be  
動詞の使い方の正誤判断をさせる be 動詞理解度確  
認事前テスト(資料1)を実施した。

次に、be 動詞の意味と使い方、さらに正しい英訳  
ができるよう解説をした。(資料2) 詳細は4.2で述  
べる。

その後、再度理解度確認事後テスト(資料3)を行い、  
be 動詞の使い方の正誤判断をさせると同時に、英訳  
するために必要な手順として不可欠な、ウナギ文を  
意味の通る日本語に書き換えられるかもテストした。  
そして、誤っていると判断した英文を、「意味順」を  
使って正しく書くことができるようになったかも確  
認した。

事後テストでは、事前テスト問題に下記の例文を  
付け加えた。この例文は授業実践で解説を行ったの  
で、その理解度を知るために事後テストに加えた。

I am home economics. (私は家政学部です。)

### 4.2 授業実践

授業では、『総合英語 One』(金谷、馬場、高山、  
2014)から、間違えやすい文として前章に挙げた英  
文(3)c. I am spaghetti. d. I am the Shinkansen. e.  
He is sickness. f. My father is a kitchen. と、以下  
に示す8つの誤った英文の正誤判断のしかたを解説  
し、併せて正しく意図を伝える英文の作り方を、「意  
味順」を使って解説した。(資料2)

資料2



1. 夕飯は何?

「今日はカレーよ」  
Today is curry and rice.

3. どこにお住まいですか?

「私は岡崎です」  
①意味の通る日本語にする。  
私は岡崎に住んでいます。  
②意味順にあてはめる。

だれが・なにが	する・(です)	だれ・なに	どこ	いつ
I	live		in Okazaki.	

夕飯は何?

「今日はカレーよ。」  
①意味の通る日本語にする。  
今日はカレーを食べる予定です。  
②意味順にあてはめる。

だれが・なにが	する・(です)	だれ・なに
We	are going to eat	curry and rice.

4. 明日の予定は?

私はバイトです。  
I am a part-time job.

2. ペットは何を飼ってる?

「僕は犬」  
I am a dog.

4. 明日の予定は?

「私はバイトです」  
①意味の通る日本語にする。  
私はバイトをする予定です。  
②意味順にあてはめる。

だれが・なにが	する・(です)	だれ・なに
I	am going to do	a part-time job.

2. ペットは何を飼ってる?

「僕は犬」  
①意味の通る日本語にする。  
僕は犬を飼っています。  
②意味順にあてはめる。

だれが・なにが	する・(です)	だれ・なに
I	have	a dog.

5. 何が演奏できますか?

私はバイオリン。  
I am a violin.

3. どこにお住まいですか?

私は岡崎です。  
I am Okazaki.

5. 何が演奏できますか?

「私はバイオリン」  
①意味の通る日本語にする。  
私はバイオリンを演奏できます。  
②意味順にあてはめる。

だれが・なにが	する・(です)	だれ・なに
I	can play	the violin.

6. 専攻は何ですか？

私は家政学部です。  
I am home economics.

6. 専攻は何ですか

「私は家政学です」 (※幼児教育 early child care)

①意味の通る日本語にする。  
私は家政学を専攻しています。

②意味順にあてはめる。

たれが/なにが	する(です)	たれ/なに
I	major in	home economics.

7. 明日は英語のテストです。

Tomorrow is an English test.

7. 明日は英語のテストです。

「明日は英語のテストです。」 A(明日)≠B(テスト)

①意味の通る日本語にする。  
私たちは明日、英語のテストを受ける予定です。

②意味順にあてはめる。

たれが	する(です)	たれ/なに	いつ
We	are going to take	an English test	tomorrow.

8. 私の目標は小学校の先生です。

My goal is a homeroom teacher.

8. 私の目標は小学校の先生です。

「私の目標は小学校の先生です。」  
A(私の目標)≠B(小学校の先生)

①意味の通る日本語にする。(A=Bの日本語にする)  
私の目標(A)は「小学校の先生になること」(B)です。

②意味順にあてはめる

たれが/なにが	する(です)	たれ/なに
My goal	is	to become a homeroom teacher.

まとめ(1)

日本語の「AはBです」には、英語のbe動詞で表す文のほかに、一般動詞で表す意味をたくさん含んでいる。**ウナギ文に注意!**

AはBです

～に住んでいます。  
～を食べます。  
～ができません。  
～に所属しています。etc.

B=動詞

- ・AとBがイコールである
- ・AはBのメンバーである
- ・AはBという状態にある
- ・AはBがいる(ある)

まとめ(2)

英作文の手順

1. 日本語がA=Bかチェックする。
2. A≠Bだったら、意味の通る日本語にする。
3. 意味順ボックスを使って英作文をする。

一部の例文を事前テストと同じ文章にしなかった理由は、理解を伴わないまま、文章と正誤だけを丸暗記した結果が事後テストに反映されないようにするためである。

#### 4.3 検証方法と結果

理解度確認のため、事後テスト(資料3)を行った。問題文は、be動詞の意味別にタイプ1～4(詳細は後述)の英文を各1文ずつと、A≠B(AとBがイコールではないためbe動詞が使えない)の英文を提示し、それらの英文の正誤判断と、正しい英文への書き換えを指示した。

##### 資料3

☆正しい英文の( )に○をつけてください。間違った英文には×をつけ、意味の通る日本語に直して、正しい英文を書いてください。英語が分からない場合は日本語を英語の語順にしてください。

資料 3 続き

1. 私は大学生です。 I am a university student. ( )

日本語: \_\_\_\_\_

英文: \_\_\_\_\_

2. 私は家政学部です。 I'm home economics. ( )

日本語: \_\_\_\_\_

英文: \_\_\_\_\_

3. 「先生はどこですか？」の質問に「彼は職員室です」

He is a teachers' office. ( )

日本語: \_\_\_\_\_

英文: \_\_\_\_\_

4. 父はアメリカ人です。 My father is American. ( )

日本語: \_\_\_\_\_

英文: \_\_\_\_\_

5. 私は 18 歳です。 I am 18-years old. ( )

日本語: \_\_\_\_\_

英文: \_\_\_\_\_

6. 私はバスケットボール部です。 I am a basketball club. ( )

日本語: \_\_\_\_\_

英文: \_\_\_\_\_

7. このハンバーガーは大きいです。 This hamburger is big. ( )

日本語: \_\_\_\_\_

英文: \_\_\_\_\_

8. 明日は英語のテストです。 Tomorrow is an English test. ( )

日本語: \_\_\_\_\_

英文: \_\_\_\_\_

9. レストランで「何にする？」の質問に「私はスパゲッティ」

I am spaghetti. ( )

日本語: \_\_\_\_\_

英文: \_\_\_\_\_

10. 「あなたは どうやって大阪に行きますか」に「私は新幹線です。」

I am the Shinkansen. ( )

日本語: \_\_\_\_\_

英文: \_\_\_\_\_

11. 「どのアーティストが好きですか？」に「私は嵐！」

I am Arashi. ( )

日本語: \_\_\_\_\_

英文: \_\_\_\_\_

12. 目標は保育士です。

My goal is a nursery school teacher. ( )

日本語: \_\_\_\_\_

英文: \_\_\_\_\_

検証方法は、事前テストの問題文 1,2,3,6 を、be 動詞の意味別にタイプ 1～4 (詳細は後述) に分けて理解度を検証した。尚、事後の問題文のナンバーは一致していない。

A≠B の問題文 5 および 7～12 は、英文の正誤判断と、誤っていると判断した場合、正しい英文に直すことができているかを検証した。

ただし、学生の英作文の正誤は、本実践の目的である語順を理解したかどうかには焦点を当てて判断したため、スペリングのミスや語彙、冠詞、記号の表記ミス等は間違いとしてカウントしていない。また、語彙力不足が原因で英文は書けないが「意味順」は理解できている学生を抽出する目的で、単語が分からない場合は日本語を英語の意味順に並べ替えるよう指示した。

以下に結果を述べる。

**タイプ 1. A と B はイコールである。**

問題文 3: 私の父はアメリカ人です。

My father is American.

事前テストでは 90%、事後テストでは 100%の学生が正しいと判断できた。

**タイプ 2. A は B のメンバーである。**

問題文 1: 私は大学生です。

I am a university student.

事前テスト、事後テストともに 100%の学生が正しいと判断できた。

**タイプ 3. A は B (形容詞) という状態にある。**

問題文 4: 私は 18 歳です。

I am 18-years-old. (事前、事後ともに 100%)

問題文 6: このハンバーガーは大きいです。

This hamburger is big. (事前 95%、事後 96%)

**タイプ 4. A は B にいる。(B は場所を表す語句)**

問題文 2: 彼は職員室です。

\*He is a teachers' office.

事前テストでは 56%が、事後テストでは 84%がこの英文は正しくないと判断できた。内、正しい英文を書くことができた学生の割合は 83%であった。

**A≠B の英文正誤判断**

以下、英文が誤りだと正しく判断できた学生の割合を示す。英作文正解率については、文章が誤りであると判断した学生のうちの何パーセントが正しい英

文を書けたかを表す。

**問題文 5:** 私はバスケットボール部です。

I am a basketball club.

事前：68% 事後：73% 英文正解率：73%

**問題文 7:** 明日は英語のテストです。

Tomorrow is an English test.

事前：29% 事後：79% 英文正解率：57%

**問題文 8:** 私はスパゲティ。

I am spaghetti.

事前：85% 事後：94% 英文正解率：42%

**問題文 9:** 私は新幹線です。

I am the Shinkansen.

事前：85% 事後：98% 英文正解率：32%

**問題文 10:** (「どのアーティストが好き？」の答)

私は嵐!

I am Arashi!

事前：85% 事後：85% 英文正解率：92%

**問題文 11:** 目標は保育士です。

My goal is a nursery school teacher.

事前：15% 事後：38% 英文正解率：63%

**問題文 12:** 私は家政学部です。

I am home economics.

事後のみ 85% 英文正解率：28%

## 5 結果検証と考察

この章では、前章の調査結果を検証する。

### 5.1 正答率が高かった設問

以下の3つのタイプ1 (AとBはイコールである)、2 (AはBのメンバーである)、3 (Aは形容詞である) については、事前事後共にほぼ全員の学生が正しいと判断できている。このことから、これらのbe動詞の意味は、学生は正しく捉えていることが分かる。

これらのbe動詞の意味は、「〇は〇〇です。」と、中学で最初に学び理解していることと一致、また、ウナギ文ではないことから、学生にとってほぼ間違

うことはないbe動詞の使い方であると言える。

I am Arashi! については、9割の学生が正しく I like Arashi. と正しく書き換えることができ、like を使った文章は使用頻度が高く、定着しているため、「私は嵐!」の意味を簡単に正しく理解し、正しい英文に書き換えることができたと言える。本来、英訳をする時は、このように日本語の字面と発信したい意図を区別する必要がある。そのためのステップとして、意味の通る日本語を考えてから英文を作ることストラテジーとして授業実践で教授したが、like を使う文についてはすでにそれが自動的にできていると言えるであろう。

### 5.2 正答率が低かった設問

前章のタイプ4の「AはBにいる。(Bは場所を表す語句)」については、He is a teachers' office. が正しくないと判断できた学生の割合は事前テストでほぼ6割であったが、事後ではほぼ8割になり、このタイプのウナギ文の意味の理解は改善したと言える。ただし、誤っていると判断した学生のうち正しい英文を書くことができた学生は8割、全体に対する割合では7割であることから、このタイプの英作文は学生にとって容易ではないことが分かる。また、日本語を英語の語順に並べ替えることはできたが、He いる (日本語表記) in the teachers' office. と書いた解答や He in the teachers' office. や He there is teachers' office. などの誤った英文が見られ、be動詞の理解がまだできていない学生がいることが分かる。要因としては、be動詞そのものに対応する明確な日本語がないために、be動詞の意味の理解が難しいのではないかと考えられる。このタイプの日本語を英訳するためには、日本語のウナギ文の正しい理解とbe動詞の意味と使い方を正しく理解するという2つのハードルがあり、初級学習者にとっては難易度が高いと言える。

次にウナギ文、つまりA≠Bのタイプの文章の正誤判断について検証する。

まず、I am a basketball club. という英文は、事前、事後の結果はともに7割前後の正解率で正誤判断は比較的できていると言えるが、誤りと判断できた学生のうち正しく意味を伝える日本語「私はバスケットボール部に所属している。」または、同意を表す日本文に書き換えられ、更に正しい英文が書けた学生はそのうちの7割だった。その割合は参加者全体に対して5割と低い割合で、全体的に日本文の書き



換え、英文ともに無回答が目立つことから、「私はバスケットボール部です。」の意味を理解できていない、もしくは適切な文に言い換えられない学生が多いと推測できる。

問題文 7 の「明日は英語のテストです。」  
Tomorrow is an English test. については、正誤判断正解率は、事前テストの 3 割から事後テストでは 7 割に大幅に上昇しているが、これが間違いであるという実践授業での解説を記憶していただけた結果と考えられる。なぜならば、正しい英文が書けた学生は、これを誤りと判断した 7 割の学生のうちの 6 割弱で、正しい英文が書けなかった原因は語彙不足以外に、English test is tomorrow. と書き換えた英文が散見されたことから Tomorrow と English test がイコールではないことが理解できていないことが推測できるからである。

正しい英訳ができるためには、日本語の意味の理解が不可欠だが、この結果から「明日は英語のテストです。」は「明日イコール英語のテストではない」ことを理解することが日本人にはとても難しいことが分かる。これは日本語理解の問題であるが、正しく英訳をできるようになるために、このような日本語の解釈についての明示的な説明と意識付けが必要であると言える。

I am spaghetti. I am the Shinkansen. I am Arashi! の 3 文については、いずれも事前、事後テストの正誤判断の正解率は 9 割だったことから、判断は難しくないことが分かる。しかし、I am spaghetti. は 4 割、I am the Shinkansen. は 3 割の学生しか正しい英文を書くことができていない。原因は、eat や have, take などの基本的語彙の不足が原因であることが解答から分かった。

「目標は保育士です。」My goal is a nursery school teacher. は、この英文が誤っていることを判断できた学生の割合は事前 2 割、事後でも 4 割にとどまり非常に低い正答率である。本来、「目標」は「保育士」ではなく、「目標」は「保育士になること」と理解し、英文は My goal is to become a nursery school teacher. と A=B の B の部分を、to 不定詞を使って名詞句にしなければならない。これも「明日は英語のテストです。」Tomorrow is an English test. 同様、英語を日本語に置き換えて、日本語話者の感覚で理解してしまうために、「目標」と「保育士」が be 動詞の意味の A=B に当てはまらないことを感覚的に理解することが難しい学生が多かった。

私は家政学部です。I am home economics. については、事後テストのみであるが、実践授業で理解できたかを調査し、9 割の学生が正しくないと回答していることから、理解できていると判断できる。しかし、英訳は、I major in home economics. のほかに I study home economics. も正しい意味を伝えているので正解としたが、正しい英文が書けた学生の率は 3 割と低い結果であった。多くの学生は、この英文が正しくないと判断でき、英語の語順が分かっているにもかかわらず書けないことが解答から読み取れた。Kato (2018) は大学での半期の「意味順」活用の実践を通して、学生は語彙力の重要性を自ら認識したことが成果であったと報告しているが、やはり意味順を活用するためには、最低限の語彙力が不可欠であることが分かった。

## 6 まとめ

「私は〇〇です。」というウナギ文を、なんでも be 動詞を使って書く間違いが多く、学生に共通して見られることから、日本語のウナギ文と be 動詞の意味の正しい知識と使い方を理解させることで、多くの学生の躓きを解消できるのではないかと仮説のもと、今回の実践を行った。

また、いくつかのウナギ文の意味を考え、その意味を伝える英文を書くことができるよう、「意味順」を使って指導した。

その結果、事後の確認テストでは、学生が中学校で習った be 動詞の意味、すなわち「1. A と B はイコールである。」「2. A は B のメンバーである。」「3. A は B という状態にある。」に当てはまる英文は理解できていることは確認できた。

一方で、主語である A が Tomorrow や My goal などの人間ではない場合や、B に前置詞を伴う語句を使ったり、to 不定詞や動名詞を使って名詞句にしたパターンは理解が難しいことが分かった。

本実践を通して、be 動詞の意味のうち、学生が理解している意味と、理解が難しいパターンが分かり、今後のリメディアル教育に優先的に取り入れるべき学習内容が見えてきたことは成果と言える。今回判明した、理解が難しいパターンを重点的に教授する機会が必要である。

もう 1 つの成果は、「中学校の時にこのことを知りたかった。」という学生の声があったが、今まで明示的に教授されることがないウナギ文に対する気付

きを喚起できたことが挙げられる。この学生のコメントから、文脈に頼る (high context)<sup>注2</sup> 日本語を、文脈にあまり頼らない (low context) 英語にするために、字面を訳すのではなく、ウナギ文を始めとする日本語の意味を精査し、解釈するステップが必要不可欠であることを学習者に早い段階で指導し、時間をかけて繰り返し習慣づけていくべき事項のひとつであることが示唆として得られた。また、この日本語と英語の違いについての指導は、教科としての外国語科を開始する小学校高学年で、小学校学習指導要領第2章第10節 (外国語) の第一目標に掲げられている学習目標「(1)外国語の音声や文字, 語彙, 表現, 文構造, 言語の働きなどについて, 日本語と外国語との違いに気付き, これらの知識を理解するとともに (以下、省略)」(下線は筆者によるもの) に相当する学習事項で、児童に気付きを促す指導内容に含めることを提案し、具体的な教案を今後の研究課題としたい。

be 動詞指導については、3.2 で述べた田川(2008)が指摘している通り、be 動詞を日本語の助詞として使用していると思われる英文が見受けられ、このことについての明示的な指導も必要であることが分かった。

「意味順」の指導については、単語が分からなくても英語の語順について理解している学生を抽出する目的で、英語が分からなければ日本語を英語の語順に並べ替えるよう指示したが、文中の分からない単語を日本語で書いてある少数の答案以外は、ほとんどが無回答で、語順が分かっているかどうかはつきりと分かるものはなかった。

本実践は、中学校英語程度の基礎知識があることを前提に、気づきを促し、躓きを解消する目的で行ったが、前提としての最低限の基礎知識、特に中学校、高校で習得しているはずの語彙力があると認められる学生がごく僅かだったことが改めて分かり、事前の語彙力強化をしたうえで、ウナギ文と be 動詞の理解、「意味順」の活用を別々に時間をかけて行うべきであることが今後への示唆となった。

## 注

- (1) The NICT JLE Corpus 国立研究開発法人情報通信研究機構が株式会社アルクの協力のもと開発したコーパス。 [https://alaginrc.nict.go.jp/nict\\_jle/](https://alaginrc.nict.go.jp/nict_jle/)

- (2) high context とは、文化の違いを示すために、文化人類学者 E.Hall が用いた用語。コミュニケーションにおいてコンテキスト (状況) に依存する度合いの高い文化を高コンテキスト文化 (high context culture) と呼び、コンテキストへの依存度が低い文化を低コンテキスト文化と呼ぶ。お互いが強い人間関係で結ばれていて、情報が集団で共有されている文化は高コンテキスト文化である。日本文化は高コンテキスト文化であると考えられている。(英語教育用語辞典第3版 白畑、富田、村野井、若林 (2019) より)

## 引用文献

- 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領平成 (29 年告示) 第2章第10節「外国語」p156 Retrieved from [https://www.mext.go.jp/content/1413522\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf) (令和元年 12 月 31 日時点)

## 参考文献

- 和泉絵美・内元清貴・井佐原均 (2005) 「エラータグ付き学習者コーパスを用いた日本人英語学習者の主要文法形態素の習得順序に関する分析」『自然言語処理』, 12 巻 4 号 pp. 211-225 Retrieved from [https://www.jstage.jst.go.jp/article/jnlp1994/12/4/12\\_4\\_211/pdf-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jnlp1994/12/4/12_4_211/pdf-char/ja) (令和元年 12 月 31 日時点)
- 金谷憲・馬場哲生・高山芳樹 (2014) 『総合英語 One』, アルク
- 甲田直喜(2011) 「リメディアル教育における文法項目の誤答調査と到達度目標」『淑徳短期大学研究紀要』, 50 巻 pp.225-240
- 執行智子・宅間雅哉・大島幸・船田まなみ・カレイラ松崎「大学生のためのリメディアル英語教材の研究」(2019). 『東京未来大学研究紀要』, Vol.13 pp.75-85 Retrieved from [https://www.jstage.jst.go.jp/article/tfu/13/0/13\\_75/\\_pdf-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/tfu/13/0/13_75/_pdf-char/ja) (令和元年 12 月 31 日時点)
- 白畑知彦・若林茂則・村野井仁 (2010). 『詳説第二言語習得研究 理論から研究法まで』, 研究社.
- 高本條治(1995). 「「ウナギ文」の語用論的分析 (1) : 文脈における語彙統語構造の発展と拡張」『上越教育大学研究紀要』, 上越教育大学 15 巻 1 号 pp.123-136
- 田川憲二郎(2008). 「be 動詞の誤用と初学時の導入順序(言語教育編)」『Scientific approaches to language』, 7 巻 pp.269-288 Retrieved from <http://id.nii.ac.jp/1092/00000189/> (令和元年 12 月 31 日時点)
- 永田 亮・西手 翔矢・乙武 北斗 (2018). 「語と補語の意味的關係を考慮した be 動詞の過剰一般化誤り検出」『ジャーナル人工知能学会全国大会論文集』, 一般社団法人 人工知能学会 JSAI2018 巻 3G1-01 Retrieved from [https://www.jstage.jst.go.jp/article/pjsai/JSAI2018/0/JSAI2018\\_3G101/\\_pdf-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/pjsai/JSAI2018/0/JSAI2018_3G101/_pdf-char/ja) (令和元年 12 月 31 日時点)
- Jojima, T., Oyabu, H., Jinnouchi, Y. (2018) A collaborative exploration of MAP Grammar in an EFL classroom. In Tajino, A (Ed.), *A New Approach to English Pedagogical Grammar*. Routledge pp175-184

- Kato, Y., Watari, H., & Bolstad, F. (2018) A collaborative exploration of MAP Grammar in an EFL classroom. In Tajino, A (Ed.), *A New Approach to English Pedagogical Grammar*. Routledge 160-171
- Tajino, A. (2018) *A New Approach to English Pedagogical Grammar*. Routledge

(原稿受理年月日 : 2020 年 1 月 15 日)